

耕縁自豊

NO.66 西畑亮一

先月は、段落が3つでした。1つ目はあるテレビ番組のこと。偶然に見たその「情熱大陸」という番組で、探検昆虫学者として登場されていた西田賢司さ

んと私との共通点を感じ、どうしても脱線して市川での観察体験を読んで欲しくなったわけです。私の、あの自由な研究は、名前ばかりな自由研究ではなく、アメリカの大学で行われているインディペンデント・スタディや勝間和代さんが提唱されている「インディペンデントな生き方」の小学生版ではなかったかと思えます。自由と言うより、一個人の自主独立な研究ですね。あそこで、今日まで続く私の生命観や自然観の方向性がほぼ決まったように思います。

そして、西田さんと重なるであろう虫への想いと、むかしむかし市川で、そんなこととする小学生がおったんかとぜひとも知ってもらいたくて、これまで誰にも話したことの無い私の水生生物の観察の様子を書きました。それが2つ目です。私の観察行動を、今の人の西田さんや昔の人のニュートンと同列で書いていますが、レベルは全然違いますね。私は誰にも習わない自己流ですし、私的な経験として記憶に残っているだけです。しかし、観察対象に対する敬虔な気持ちは共通していると思っています。さらに言えば、観察主体としての自分自身を観察対象に比して優位に置かない。それは、由美子さんから教えてもらった二項同体的な立ち位置とでも言うるのではないのでしょうか。対象に対し主体としてその場をさもりードしているかのようではありますが、実は虫が生きていられない世界では人も生き残れず、対象である虫と主体である人間とは一体としてこの世界で生きているということなんです。

最後、3つ目の段落では、貴重な出会いから私が受け取れたことを整理しまとめました。①西田賢司さんからは大切な多様性と職業観、②これまた小学生の頃によく歌った「手のひらを太陽に」からは共に生きている関係性、③武野武治さんとアレン・ネルソンさんからは「私たちは助け合える」という希望を、それぞれ受け取りました。この3つから、私たちにとって最も肝心なことは、本来、人と人との世界で働いているはずの「万人引力」(ニュートンに倣って命名してみました)としての人間性ではないかと思に至ったわけなんです。

ところが、私たちは、この共に生きている世界で持ち味を生かし必要十分に助け合っているのでしょうか。「万人引力」は働かず、助け合うどころか正反対のことを毎日繰り返しているように思いませんか。自由な振る舞いと称して如何に他者を欺き出し抜き、排他的な富の独占と集中によって、あらゆる自然の破壊に汲々となっていることでしょうか。物質的人間は、物質上の制約条件から誰一人逃れることはできません。その点で、私たちはすべて平等です。「絶対平等」と言っても過言ではないでしょう。もし人間に真なる自由があるとすれば、そのことをわかる自由ではないのでしょうか。例えば、封建時代の絶対君主も現代のITや地下資源長者も、その富の独占と集中に比例して寿命以上に何年も生きることや1日の消費カロリーを数千倍にすることなどまったく叶わぬことだからです。そのような非常に制約された有限でひ弱な人間が、各地で世代を繋ぎ、この自然世界で共生しながら永続的に生存し存続していくためには、地上で極めて身勝手な振る舞いに酔う人間こそ無条件で誰もが助け合って生きるしかないと思うのですが……いかがでしょうか。

小田実さんは、「『助ける』は、『助ける』側がまさにその自分の行為によって『助けられる』側と同じ平面に自分をおく『助ける』だ」と書いてくれています。パウロ・フレイレはさらに進めて、「救いは他者とともにのみ成し遂げられる」と。そこで、助け合える者たちの自由と平等について考えてみました。先月に書いた私の水生生物の観察、それを教師から押し付けられてはいない自由な研究と言いましたが、矛盾するようですがそれは非常に制約された自由でした。あれ以外の観察態度はなく、あのような行動を自然に選んでいたわけです。では、どのような自由であったかと言えば、それは相手を傷つけない殺さない……一緒に生きてもらう自由です。そのことによってまさに、私は自己の自由な振る舞いの中で水生生物たちと「同じ平面に」立ち、虫にも通じたかも知れない人間性を発揮して虫たちとの平等な領域へ、あの観察上の振る舞いによってある程度到達できていたんじゃないかと思うのです。ローザ・ルクセンブルグが「自由とは意見を異にする者の自由だ」と言ってくれているように、どのような他者(虫なら人とは異なり過ぎるぐらいの意見があるでしょうね)であっても、その他者の自由を守り互いに助け合って生活圏を無駄に侵さないことが両者の平等を具現化する、したがって小さな虫たちとも共存できる唯一の方法ではないかと思いました。助け合える平等な世界、対等で双方向な世界を実現する場合にだけ自由は平等と「同じ平面に」立つ、そう私は考えたのです。

